

ジュラシック・トーク

Part 2 オペラ「オベロン」とその序曲

カール・マリア・フォン・ウェーバーは「ドイツ国民オペラの創始者」と言われています。彼の業績は、たとえばモーツァルトの「魔笛」や「後宮からの逃走」のような、間にドイツ語のセリフを挟んで音楽が進行する「ジंकシュピール」という昔からある形は踏襲した上で、ドイツ的な素材を前面に出して代表作である「魔弾の射手」のようなオペラを作った、ということになるのでしょうか。

その「魔弾の射手」の成功はヨーロッパ中に知れ渡り、ロンドンのロイヤル・オペラ（コヴェントガーデン歌劇場）からも作曲の依頼が舞い込むようになりました。そこで、かの地で上演するために英語の台本によって作られたのが、ウェーバーの最後のオペラとなった「オベロン」です。

「オベロン」というのは、シェイクスピアの「真夏の夜の夢」に登場する妖精の王として知られていますね。このオペラの台本は、ドイツの詩人、クリストフ・マルティン・ヴィーラントが 1780 年に発表した同名の叙事詩を元に、ジェイムズ・ロビンソン・プランチェという台本作家が書いたものです。この物語にはまさにその「真夏の夜の夢」のキャラクターのバックなどの妖精も登場します。さらに、船が難破し、異国の海岸に打ち上げられるという、同じシェイクスピアの「テンペスト」のエピソードも付け加えられていますし、モーツァルトのそれぞれ「魔笛」や「後宮」とよく似たプロットもあります。

依頼から 2 年後の 1826 年にこのオペラは完成し、作曲家自身の指揮によって初演されました。しかし、ウェーバーはその直後、長らく患っていた結核のためイギリスで亡くなってしまいました。

代表作である「魔弾の射手」でさえ、最近ではめったに上演されなくなっていますが、この「オベロン」も台本があまりにハチャメチャなこともあって、実際に取り上げるオペラハウスはほとんどありません。ただ、その序曲には、いかにもコンサートの幕開けにふさわしいワクワク感と甘美なメロディ、沸き立つようなクライマックスがぎっしり詰まっていて、オーケストラのコンサートには欠かせないものとなっています。そして、この序曲に使われている音楽的なモチーフは、全てオペラの本編の中に登場します。ここでは、それぞれが、どのような曲から取られたモチーフなのかを調べてみました。

それぞれのモチーフの楽譜の脇にある QR コードを読み込むと、実際のオペラの中の音楽が聴こえます。

最初のゆったりとした序奏の部分では、まずホルンが妖精の王オベロンをあらわす角笛のモチーフを演奏します。



オペラの中では、オベロンがフランスの騎士ヒュオンに恋人探しを命じるときに、この角笛を「困ったときはこの角笛を吹いてわしを呼べ」と差し出します（まるで「魔笛」!）。

その後にフルートとクラリネットで奏でられる細かい音符の煌めくようなモチーフは、妖精たちをあらわしたものです。



それに続く金管の荘厳なファンファーレ（右ページ）はオペラの終幕、ヒュオンが国王となるシーンで鳴り響く音楽です。



「ジャン」という全合奏をきっかけに軽やかなテンポの主部の提示部（64小節目）になると、そこでまずヴァイオリンによって低音から高音までめまぐるしく動き回るテーマが出てきます（第1主題）。



これは、バグダッドの宮殿から恋人のレイザを救い出したヒュオンと、それぞれの従者のファティマとシエラスミンという4人の登場人物が船に乗って逃げようと歌う「暗く青い海の上 Over the dark blue waters」という四重唱の中間部に現れるものです。

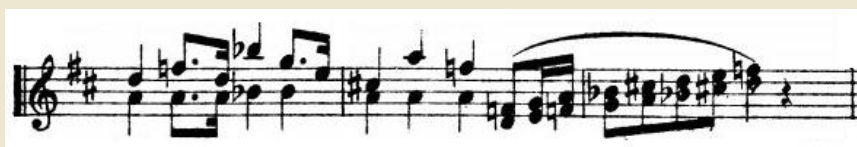
そのあと 65小節目から、対照的にクラリネットで甘く歌われるのが、ヒュオンがレイザを思って歌う「少年時代から戦場で鍛えてきた From boyhood trained in tented field! 」というアリアの、やはり中間部分から取られたモチーフです（第2主題の1）。



そして、提示部の最後に出てくるのが、レイザが乗っていた船が嵐で難破したあとに歌う「海よ、巨大な怪物よ Ocean! thou mighty monster」という、これだけは独立して演奏される機会も多いアリアの最後部分に出てくる、まさにロマン派特有の倚音（非和声音）を多用した勇壮なテーマです（第2主題の2）。



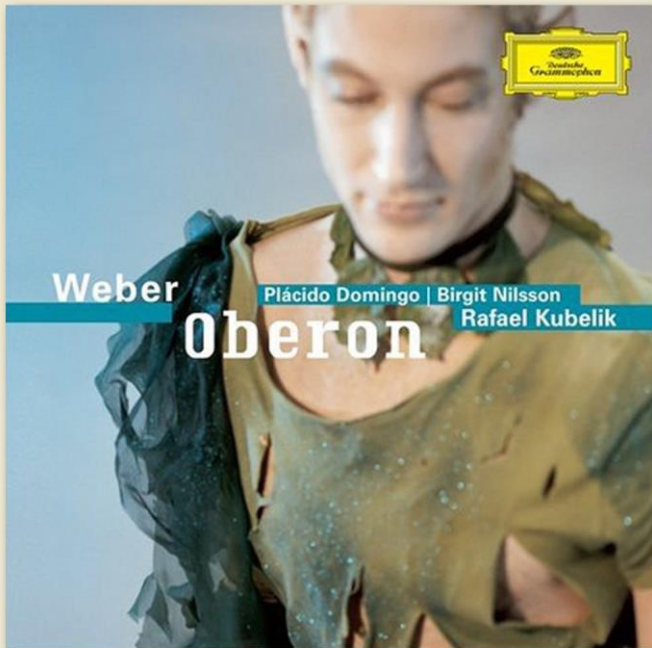
さらに、展開部に入ると、第1主題の後に新しいテーマが現れます。



これは、妖精パックが聖霊を呼び出す時に歌う「空気と大地と海の聖霊よ Spirits of air, and earth and sea! 」というソロの中に出てくるモチーフです。

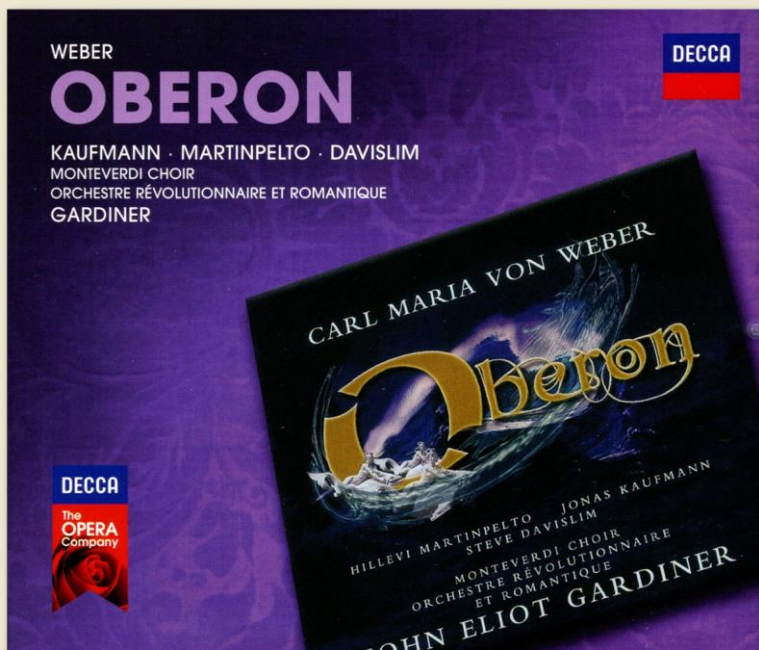
■「オベロン」の全曲盤 CD

歌劇「オベロン」の全曲が収録された映像は、寡聞にして見たことがありません。録音されたものも、アリアが単発で歌われているものはありますが、全曲が収録されていて、現在入手できるのは 1970 年に録音されたクーベリック盤（DG/ドイツ語版）と、2002 年に録音されたガーディナー盤（PHILIPS→DECCA/英語版/ピリオド楽器）の 2 種類のリイシュー CD だけのようです。



Plácido Domingo (Huon)
Hermann Prey (Oberon)
Birgit Nilsson (Reiza)
Marga Schiml (Puck)
Rafael Kubelik/
Chor & Symphonieorchester
des Bayerischen Rundfunks
DG/477 5644

ドミンゴ、プライ、そしてビルギット・ニルソンという往年の名歌手たちを起用した豪華な布陣です。



Jonas Kaufmann(Huon)
Steve Davislim(Oberon)
Hillevi Martinpelto(Reiza)
Franses Bourne(Puck)
John Eliot Gardiner/
Monteverdi Choir
Orchstre Révolutionnaire et Romantique
DECCA/478 3488

最初に発売された時には全くの無名だったテノールのヨナス・カウフマンがヒュオンを歌っています。ですから、ジャケットでの彼の名前の順番が最初は 2 番目だったものが、大スターとなった今では一番前に変わっています。